

連載

猫の後ろ姿からゾンビ的状况へ：DJ 風に（2）

川村 邦光

佐保川の桜並木

宵っ張りの皆さん、今宵も付き合っていただき、ありがとう。関西はまさしく春です。東北ではまだそうはいきません。「春宵一刻、値千金、花に清香有り、月に陰有り、歌管の楼台、声細細、鞦韆の院落、夜沈沈」、蘇軾の詩です。奈良・佐保川の桜並木も今が盛りと、花が咲き誇っています。夜中は明かりが灯されていないので見えません。闇のなかに桜の花が深々と匂っているかのようです。

昼過ぎ、佐保川の土手を歩きました。満開から早々と散り始め、花びらがひらひらと舞っていました。「春三月^{くび}縊り残され花に舞ふ」、アナキスト大杉栄が大逆事件後、幸徳秋水らを弔った句です。「これって、春の匂いかな」という吉田秋生のマンガ『櫻の園』も思い浮かべました。三条中学校を眼にして少し歩くと、奈良県立の図書館があります。それなりに本があり、この頃よく行っています。佐保川の幾つかの場に大きな鯉がたむろし、亀が岩場に甲羅を干している時もあります。水面には白鷺や鴨、川鶉が浮び、鶺鴒、鶉が飛び跳ねています。時たま、川蟬を見かけます。それこそ瑠璃色にきらびやかに光って、はっとさせます。

今宵の曲はカール・オルフの『カルミナ・ブラーナ』（シカゴ交響楽団、ジェムズ・レヴァイン指揮、1984年）、賑やかに流しつづけます。これは、ドイツ・バイエルン地方のベネディクト・ボイレン（ブラーナ）修道院の図書室から発見された、中世の歌集（カルミナ）の詩から、1936年、ベルリン・オリンピックの時に作曲、翌年、初演されました。まさしくナチス時代、運命の女神（フォルトゥーナ）は人生を、世界を翻弄していきます。「まったく呪わしいこの人生は、意地悪な目つきすると思えば、今度はまた愛想よくして見せる。ふざけた気持ちで、ときには窮乏を、ときには権力を、氷のように融き消して見せる」（呉茂一訳）と歌われています。オルフが苛烈なナチス時代をどのように生きたのかは調べていません。前回のつづきを話していきます。しばし寛いで聴いてください。

ゾンビ的存在

イエスは肉体の傷痕・聖痕と肉体そのもの＝パンの共食、聖餐という交わりを通じて、天上と地上を繋いで媒介していく、仲介者として位置づけられます。生と死を包摂し、死体であるとともに生体でもあり、

動くことのできる肉体です。イエスはゾンビ的存在、そしてゾンビ的状况を生きたのです、40日ほどですが。こうした生と死、もしくは生体と死体と背中合わせの肉体的な存在をゾンビ的存在、そのうごめいている状況をゾンビ的状况と呼んでみましょう。生と死のはざま、日常と非日常の間にある、政治なるものを浮き彫りにすることができるかもしれません。

ゾンビ映画は今でも人気がありますが、ゾンビそのものは邪悪なものとしてイメージされています。忌み嫌われ、憎悪され、酷く排除され、殲滅・絶滅の対象になります。日常の世界に突然現われた単なる異物・汚物としてばかりではなく、人やこの世に危害を与える存在として、徹底して排斥され抹殺されることとなります。哀しく憐れな存在ですが、正と邪、善と悪、清さと穢れ、清浄と不浄の構図がくっきりと描かれます。逆に言えば、非ゾンビの人間という存在のおぞましさ、邪悪さそのものを投影されているとも言えます。

他方では、ゾンビは気楽です。一応、意思もしくは精神、さらには魂なるものを欠如しているとされます。いわば、純粹肉体です。だが、たんなる物それ自体ではなく、志向性のない欲望そのものを体現して、かなりぎこちないのですが、自由気ままに振る舞い動き回ります。自然そのもの、あるがままにある、親鸞のいう、自然法爾という境地にある、稀有の存在なのかもしれません。

喩えはあまりよくないかもしれませんが、認知症の徘徊老人を思い描いてみてく

ださい。善悪、正邪、美醜、賢愚、老若、貧富、浄穢、幸不幸、正気・狂気を、世間を超えているのではないのでしょうか。自由自在の境地に達しているのではないのでしょうか。かなり大袈裟ですが、老子の言う無為、あるいは仏陀の言う涅槃とも言えるのではないかと思います。それでは面白くないでしょう。ゾンビ的存在はあくまでもこの世に足場を持っています。絶えず世間と関わらせられて、あるいは関わって、善悪などといった世間の評判、もしくは通俗的な価値観に晒されています。

ゾンビ的存在の両義性

通俗ゾンビ観でやはり重要なのは、噛まれたり、多くは緑色の汚物を吐き掛けられたりして、人・非ゾンビがゾンビへと変態していく、メタモルフォーシスという事態です。それは血や唾液などの体液によって、感染する、伝染するという感染症・伝染病の医学的な理論に依拠して、増殖し貯蓄され、無秩序に集合・集団化し、膨張・浸潤し、暴発し跳梁していくという、ブランキズム（一揆主義）、テロリズム、アナキズム、コミニズム、さらには超自然的な力が転移・伝染するとするマナイズムを体現していると言えるかもしれません。

集合的かつ全体的に増殖し、拡張・侵略していくという点では、全体主義、資本主義、帝国主義、さらにはファシズムを体現しているとも言えます。これはゾンビの二極化、あるいは二項対立ではなく、両義性（アンビヴァレンス）もしくは二重性と言ったほうがいいでしょう。ちょうどそれはゾ

ンビが生死、あるいはエロスとタナトスを背中合わせにした生-死体であるのと同じです。

アナキズムでも、ファシズムでも、ゾンビはメタファになります。感染・伝染して増殖を繰り返し、一国に留まることなく、世界を超えていく、インターナショナルな存在、コスモポリタンとなります。そして、ブランキスト、テロリスト、アナキスト、ソーシャリスト、コミュニスト、キャピタリスト、インペリアリスト、ファシストなどなど、ゾンビ的存在の多岐にわたる肩書きのリストをつづけることができます。

この世の生を蹂躪し跳躍して、肉体の赴くままに生きています。本能と言えるかどうかは解りません。もとよりなんら悪意はなく、危害を加えるというよりも、むしろ噛みついて傷を与えます。生体は傷つきやすい、可塑性は少しあろうが、死にいたることもあります。傷を与える、もしくは傷を負わせるということ、それは迎え入れる仕草であり、言うなれば、見返りを求めない、無償の贈与です。ホスタリテイ(敵意)はなく、排除され、解体されながらも、意図もせず、ひたすらホスピタリテイ(歓待)を能動的にあまねく発揮していくこととなります。最近、歓待という言葉をよく見かけるようになりなした。歓待、この世にはほとんどない、あるいは忘れ去られてしまったため、ノスタルジックに想起され掘り起こされているのでしょうか。犠牲を厭わずに、ひたすら歓待していくゾンビ的存在、それはキャピタリスト、インペリアリスト、ファシストとは決定的に異なっているのではな

いでしょうか。

準備号へのお便り

ここで一旦中断し、つづきは次回にして、準備号へのお便りが届いていますので、紹介していきたいと思います。Zさんから、「ゾンビ・コミューンは創出されるか」と題した、お便りが届いています。一部は私の文への批判と励ましと勝手に受け取りました。

「猫の後姿からゾンビ的状况へ」(以下「猫の後姿から」)に対して、「この場で、何を」と問いかけています。私はこうしたことに余りこだわらずに、ゾンビ的状况・存在について思うがままに書いています。ただ最後に「互に顔を付き合わせるのではなく、独り言ではなく、まだ見ぬ誰か、これから会うであろう誰かに向かって、何事かを伝えようと語りかける、そうした未来へと投企する姿勢を思いがけず感触できたように思います」(『MFE』創刊準備号、p.17)と、私を感じた20年6・13集会での皆さんの心意気をまとめてみました。「猫の後姿から」はこの世界の現況について考えてみようとして、書き起こしたものです。私自身も含めて、「ゾンビ的状况」にいると感じている人が多くいるのではないかという、いわば妄想から出発しています。

Zさんの「猫の後姿から」に対する批判は、ゾンビ的存在なるものの曖昧さに対してです。「はっきりと規定できないにしても、ゾンビ的存在がファシスト的・体制追隨的でもあれば、反権力的・反体制的でもあるようであり、記述が不明瞭」と指摘してい

ます。そして、「イエスをゾンビ的存在とみなすのはいいとしても、イエスはファシストの煽動者か、反権力の革命家か、はつきりしていない。それはイエスの信徒・グループ、コミュニオンにも言える」、「ゾンビは現状を捉えるメタファになるかもしれないが、リアルな情況に介入できないのではないか」と批判しています。

これは当然の批判です。私自身、明瞭に記述するのを避けてきました。どっちつかずでもあるのですが、二面性、もしくは両義性を帯びている、どちらかがどちらかへと移行するプロセスがある、ファシストでも、反権力でも、どちらでもない曖昧な領域があろうと、今のところ捉えておこうと思っています。つづきを期待してくださいとZさんには伝えたいと思います。「ゾンビ・コミュニオン」、なにやらおもしろいテーマを突きつけられたような気がします。これについては、これからじっくり考えていきたいと思っています。

Zさんは「この場で、何を」と問いかけて、準備号の全体を論評しています。紹介してみましょう。ひとつはこの雑誌での各自の位置づけと期待、もうひとつは自分の現場からの報告、この二つが別個ではなく、重なりながらテーマになっていると指摘しています。一応、二つに分けると、前者は車、古川、尹、永岡、沈恬恬、成定、富山、正明。後者は川村、竹原、謝花、近藤、鄭、日高、平野。「川村論文（エッセイ）はどちらにも分類しがたいが、一応、後者になる」と述べています。

彩りある雑性の場を編集せよ

Zさんは尹汝一「MFEの雑性のために」をまず取り上げています。「尹の雑誌とは「雑性のある程度の個性にまで導くことばの運動であるべきではないか」、私もそれが望ましい方向性だと思う。おそらく単一の個性ではない。彩りのある「多焦点」を発散させる個々の個性であろう。それを見つけ、実現するのが尹の言う「読者」である。「ことばが揺れるなら、ことばを以てその揺れを伝え、読者をその揺れに招待すればいい」、読書がそれを彩り豊かに編集する、編み集めていく。それが「広げること」と「折り畳むこと」のいわば無限運動、再編集へと連動・継続していくことになり、書き手と読み手の循環運動が生み出されてこよう。個々の個性なるものは協働して立ち上げられ、集合的な個性へと展開することになるだろうか。

「別の文章から文を引っ張ってきて再編集したい。（中略）そのような文が多くある雑誌は、私の夢想の中で元の形態から離れて、ますます雑なるものとなる」、また「書き手には思いもよらない問いが読み手によって付け加えられ、その問いかけによって書き直され、再形成された雑誌がまた読み直され、また新しい問いかけと声に出会い……このようにして他者の悩みを引き継いで、時間が蓄積され、文が増殖する雑誌」と、尹は連鎖する書き手・読み手運動、著述・読書協働態の場としての雑誌の生成する、ヘテロピア性を構想しているようである。ここに、私は先の「猫の後姿から」で不明瞭に述べられたゾンビ的状況を垣間見

たような気がする。確かにゾンビには個性がないだろうが、彩り豊かに緑色の液を吐き散らし、感染させながら増殖し、個々群れなして、編み直しながらヘテロピアを創出していく運動態なのだ。批評のすぐれた形を尹の文章に見出せよう。」

Zさんの長い文を省きながら、繋ぎ合わせて綴ってみました。書き手と読み手の編集作業、それは編成へ、編み成すことへと繋がっていき、変性をもたらすと言えるのでしょうか。ゾンビはワンパターンの振る舞いしかしないようですが、同質社会の世間から見れば、それ自体に個性が十二分あると言えるかもしれません。ゾンビの群れには確かにヘテロピアが現出するのです。

世の中のことをすべて知ることなどはできのだが、人は知ろうとします。だが、私はあまり知ろうとはしません。井のなかの蛙で上等だと思っているからです。それでも現場からの報告を読んでもと、大変だとか、世知辛いと嘆息してしまいます。煩わしさのない、しみじみとした日々、それがもっとも望ましいと思っています。

資源活用には碌なものがない

竹原論文は博物館からの報告です。「人もそうだが、地域の習俗・文化や文化財を「資源」として「活用」していくといった、有用・有益性を追い求める発想には碌なものがない。ポストが増えて、若者が就職できるわけでもないのに、仕事作りに追われ、煽り／煽られて、浮ついて過労にだけどっぷりと身を浸しているのが昨今であり、地道さに欠けているのではないか。こういう

のは年寄りの考えかもしれないが、観光・経済をアジる阿呆に踊らされる阿呆の跋扈というのが現状だ。」

Zさんは行政とそれに追随する地域住民を罵っています。博物館というのはもともと遺品・死物を収集するゾンビ的存在だが、それを「資源」として「活用」する、酷使するのは、ゾンビ的存在を見世物にすることだと思ってしまいました。そういえば、どうでもいいことですが、民俗芸能学会という小組織で矮小極まる権力抗争があったと、ある人から耳にしました。役職にはなにか利権があるのでしょうか。

帝国の物語を解体せよ

次は、謝花「鉄格子の中の声」です。「レベッカ・ソルニットの「ブレイク・ザ・ストーリー」から始まる。「支配的な文化は、それを支える柱を強化するものであり、その柱はあまりにも頻繁に、誰か別の人びとを閉じ込める檻の鉄格子となる」[『それを、真の名で呼ぶならば』渡辺由佳里訳、岩波書店、p.193]、この支配的文化・支配的物語を解体・ブレイクせよと呼びかける。

謝花は米軍基地の二つのバーベキューをレポートする。昨年、米国独立記念日に、うるま市の公園で数百人のバーベキュー・パーティーである。なんとも豪勢だ。その結果は各基地でのコロナ・クラスター発生である。普天間飛行場から発がん性の有機化合物を含む泡消化剤、約14万リットルが流出、その原因が士気を高めるために行なった、もうひとつのバーベキューであった。米軍基地は「人ひとりの一生を喰う」と、

基地返還運動家は呟いた。武装した権力と闘うには、鉄格子＝支配的文化・物語の柱を一本一本引き抜いて、その年輪を読み解き、まるごと解体しなければならない。」

Zさんのコメント、誰もが「人ひとりの一生を喰う」ゾンビにならなければならないということでしょうか。他方「人ひとりの一生を喰う」ゾンビとは、まさしく米軍基地・米国政府、また安保条約・日米地位協定を後生大事にする日本政府なのかもしれません。ゾンビの扮装で手に肉を刺した串を持って食べながら、米軍基地のなかにぞろぞろと侵入し、ついでに消火器を担いで撒き散らすというのはどうかなどと、つい夢想してしまいます。

異邦人、ルワンダから遠く離れて

近藤「未来は明日を突き抜くものに」はルワンダからのルポルタージュです。「ほぼ一年前、ルワンダ入国、10日ほどして帰国。ルワンダ着後、知人たちは「こんな状況」だからと、そっけない。「脅威の対象」になってしまったからだ。忌避される異邦人になった、ゾンビ視された。だが、「すこし呆け始めている」おばあちゃんだけは別だった。土産の抹茶味のチョコレートをおいしそうに食べ、残りのかけらを袋にしまった。そして「未来は明日を突き抜くものにある」と囁いた。おばあちゃんの「記憶の隙間」に「チョコレートの甘い時間がすこしでも溶け込んでいくなら、それでいい」。記憶は味や匂いとともにより賦活され、体験が重層化されるか。

国境閉鎖の報、急遽、帰国へ。退避する

ムズング（白人）がたむろしている。大挙して空港に押し寄せたムズングに映画『ホテル・ルワンダ』を重ね合わせ、自分のムズング「具合」に絶句。ツチ人とフツ人の抗争はどうなっているのだろうか。次に述べる、車論文の言う「魔術的観察」だろうか。おばあちゃんとの再会の可能性は「明日を突き抜く」ことを通じて、また「チョコレートの甘い時間」を互に共有することによって、必然性へと転化するのだろうか。そう願いたい。」

こいうルポルタージュ、また写真も雑誌を彩り豊かにし、「雑性」を際立たせています。写真「マスクとゴム手袋をつけて応対する携帯ショップの店員」(p.66)、グローバルの現在を実感します。近藤さんの自分のムズング「具合」に絶句は、Black Lives Matter を想起させます。テニスの全米オープンで優勝した、大坂なおみは黒人の名を記した7枚のマスクをつけ、優勝後のインタビューで「7枚のマスクでどんなメッセージを伝えたかったのか」と尋ねられ、「あなたがどんなメッセージを受け取ったのか、それの方がもっと大事です。私はみんなに話を始めてもらうことが重要だと、そんなふうに感じています」(『朝日新聞』20年9月14日夕刊)と語っています。

媒体 (medium) の構造を更新せよ

Zさんの車論文へのコメントは長いため、端折って紹介しよう。「車論文は、パンデミック状況下で世界の全面的な変化を経験していると書く。そこでは、統制と拒絶がしのぎを削っていると単純には言えないの

だが、この重層化した状況の向かうであろう動勢のなかに、誰もが否応もなく巻き込まれていく。それは不安のなかで見守るしかない、従属的・受動的な状態なのではない。危機こそ未成の時に向かう機縁なのである。「視差的観点」また「魔術的観察」とはそのようなことなのか。

車は朝鮮植民地期の作家、金南天がバルザックから得た「観察」概念を引き合いに出し、「彼にとって「観察」は他者に憑依する魔術的経験を目指しているように見える」と記す。対象に没我的に沈潜する観察、それは観察者自身の身体性を変容させる。憑依されるのではなく、「他者に憑依する」。これが解りにくい。私なりに解釈してみよう。シャーマニズムのレベルでは、憑依するのは霊的なもの、その憑依によって、被憑依者（ムーダン・巫堂、巫者）は「没我的主体」になり、身体の変容を引き起こし、霊的なものの言葉をいわば自動的に、他律的に話すだろう。だが、ここでは逆転されている。

他者・対象に観察者が憑依する。その主体は没我的だが、全面的に没我ではなく、他者・対象と同一化せず、限りなく接近していく、侵入していく。他者・対象の描写、対象を知ること、それは「自分自身がその対象になるということに近い」とする。作家・観察者の「主権者」としてのモダンな主体の解体・再構築を目指していよう。車は「「観察＝知＝生成」の境地こそ「魔術的観察の実験」の目指すところ」ではないかと述べている。

車は金の未完のままほぼ失敗した長編小

説について述べている。金の作品の人物たちは別の作品へと越境していく。別の場所・関係へと横断していく。これは「転換期を生きている当代人たちの範型」だが、生きつづけていくという「終結不可能な実験」であるとする。白土三平『忍者武芸帖』の影丸のようなものか。複数の影丸が「遠くより来たりて遠くへ去る」、そして「遠くへと去りて遠くより来たる」。

分身（ドッペルゲンガー）もしくは影武者が現われて、永続的な権力闘争を展開しつつ、時空を横断していく。第二、第三の影丸／ゲバラが続々と現われてくる。権力の呼びかけ・命令による攻勢は、車が言うように、「媒体（medium）の構造」を変更させている。車が提起するのは、身体の「変形」を通じた「媒体（medium）の構造」の更新、あるいは新編成であろう。他者・対象、世界を記述する言葉・スタイルの变革・編み直し、それが「魔術的観察の実験」、またそれを布置する「星座」ということだろう。

車論文は読解もまとめるのも一苦労だが、先を急ごう。「星座」につづけて、「世界経験が形成されるそれぞれの場所で、「観察」の過程で、その場所性を抱え持った言葉を見出し発信する時、その言葉たちがあるいはつながりあるいは衝突し合いながら作り出す効果を通して、私たちは「多焦点拡張」の運動の中で現在にかかわる知を作っていけるのではないだろうか」、「星座」を作るための場として、MFEを位置づける麗しすぎるほどの言葉である。こうした方向性にこだわり応えていけるのか。困難

ではあろうが、「必然性はまさしく可能性にすぎないのだ。可能性を高めて必然性にまでいたらしめる者のみ、歴史の摂理はまず彼岸の世界の扉を開けてくれるのだ」という金南天の言葉にそそのかされて、MFEに集う面々はきらめく銀河を航海してほしい。」

覆面とゾンビ

Zさんのお便りのなかで、いくつかを紹介するだけで、かなり長くなってしまいましたので、残念ながら、あとは省きます。車論文などに触発されて、数年前に亡くなっているのですが、同じ集合住宅に住んでいた、マスクを常に着けていた女性Iさんを思い出しましたので、コロナ状況下、瞬く間に広まったマスクについて話して見ようと思います。

マスクは覆面・仮面、扮装し正体を隠します。私が行く所と言えば、スーパーや図書館です。歩いている時にはマスクを着けず、店内・館内に入ってから着けています。マスクはあまり好きにはなれません。だが、Iさんは一日中、春夏秋冬、四季を通じて着けていました。私が見かけるのは、外で出会った時です。Iさんの家にも猫がいるので、うかがったことがありました。大きな猫がいて、抱き上げたこともありました。今でも娘さんと一緒にいます。

コロナ前、マスクをしている人は極めて少なかったでしょう。春先になると、花粉症の人がマスクを着けるくらいだったはずですが、Iさんは年がら年中マスクをしていました。それは舌癌の手術をしたた

めです。マスクをはずした顔を見たことはありませんが、舌を切り、癌の転移した顎の骨を削除したと聞いています。Iさんは話せませんでした。いつも笑顔でした。弱々しく、はかなげな笑みでした。そう私は感じていました。世間では「人は見た目だ、とうそぶいて、露に差別します。見た目も個性だ、多様性だなどとは、たやすく言えません。影ではなく、露骨にあなどり、馬鹿にします。」

そのような人でも、現在では、他の人の前だけでは、ユニークさやダイヴァーシティーは大切だと、個性や多様性を認めて尊重しているかもしれませんが、だが、卑しさをあからさまに発揮して、からかい、侮蔑し、差別します。このような言動をしない人からでも、遠ざけられ避けられています。思い当たるのは、たじろぎながら、不気味さ、脅威を懐いてしまうからなのではないかということです。多数の素面のなかに、際立ってマスク姿の者がひとりいる。黒い羊、異分子だということになるろう。

怖じ気、不気味さ、脅威の素振りは見せずに隠蔽して、無言のうちに、問答無用に顔をそむけ、除け者にして、排除したがる。これは変わることはない、人の常、世の常なのかもしれません。だが、こうした感情・感性は歴史的に生み出されてきたのだろう。ファノンの『白い仮面／黒い肌』になぞらえるなら、「白いマスク／黒い身体、とでもなるでしょうか。不気味さへのたじろぎが除け者を生み出すと言えます。」

とりあえず手掛かりとして、フロイトの不気味論を見てみましょう。フロイトは「不

こには、正常／異常、普通／異状に分けてしまうところから生じてくる、悪意もあるかもしれませんが、何気ない好悪の感情が大きく介在しているでしょう。だが、現在、ほとんどすべての人がマスクで素顔を隠しています。マスクが伝染し、世間はゾンビ的存在で溢れています。皮肉にも世間では、マスクをしない人が異分子として睨みつけられ、排除されています。Iさんは今でも存命なら、なんら指差されることはなく、マスクの群れのなかに紛れ込んでいたことでしょう。

さて、半世紀ほど遡って、マスク現象を顧みて見ましょう。「非常時」あるいは「転換期」の歴史的な「観察」というところです。私は一時期、特定の場で、覆面をしていたことがあります。ヘルメットを被り、タオルで顔を隠していたわけです。その渦中になると、なんら不気味でも、異様でもないのですが、傍から見れば、やはり異様なのでしょう。

世間からは暴力学生とか過激派などと呼ばれ、嫌われていました。でも、それが少なからず心地よかったことも確かです。ナルシズムとでも言っているのか、粹がった、世間知らずの傲慢さだったろうが、世間に背を向けつづけていこうとする、気概めいたものが生まれてきたようです。露骨に迫害されたわけではないが、嫌われたことは確かです。

無謀に打ち毀したり、火を付けたりして、「命、棒に振ろう」などとうそぶいて、はた迷惑なことをしまくって、いい気になっていたわけです。ある人々からすれば、一

般市民・無辜の民に襲いかかる無頼の徒、言うなれば思慮のないゾンビの群れです。少しは脅威を与えたのでしょうか。そこから何が始まったのか、無惨に敗退していただけなのか。ゾンビの群れは個々ばらばらになり、もとより拠点となる場を構築できず、無辜の民の群れのなかに紛れ込むほかなかった、あるいは進んでそうした。`主義者、として自立できなかったのです。情けないゾンビの徒党だったのです。

それでも、このゾンビの群れはそれこそ彩り豊かでした。反権力へ向けて、拡張はできなかったが、多焦点的ではあったでしょう。覆面スタイルは`砦の上に我的世界、築き固めよ、と、`自由の火柱輝かしく、頭上高く、燃え立たせ、身体的な転回を生成させる、車の言う「視差的観点」、視差的スタイルだったのかもしれませんが。ソルニットの言う`支配的文化・物語を解体せよ、あるいは造反有理でもいいのだが、私にとって、覆面スタイルはそれを体現し、一時であれ、言説と実践のスタイル、いわばイデオロギーを更新させたと言うことができるはずですが、新しい文化・物語を創出するほどの力量はありませんでした。群れの解体を余儀なくされ、孤立の憂愁の闇のなかに潜んでいきました。

「すぐれたストーリーテラーの仕事のひとつは、自分に割り当てられたストーリーの根底にあるストーリーをじっくり調べ、ときにはそれらを可視化し、ときにはそうしたものからわたしたちを解放することです。つまり、ストーリーをブレイクすることです。解くこと（ブレイキング）は、こ

の種の執筆においては、つくることと同じくらい創造的な行動なのです」〔ソルニット、同前、p.195〕。ゾンビの群れは物語の破壊も解体もできなかった、あるいは未完に終わったわけだが、運動の雑性を志向し、覆面／マスクの物語・イデオロギーを再編成していくことを求められているでしょう。

『カルミナ・ブラーナ』では、運命の女神が「ときには窮乏を、ときには権力を、氷のように融き消して見せる」と鳴り響かせながら繰り返し歌い、終わりに近づいています。退屈ではなかったでしょうか。それでは、ご機嫌よう。

(つづく)